

なれば、異日、必らず吾が書を提げ、貢してこれを弁せん。それまた爾^その吾が道に従事せるを忝^{かたじけなく}ずかしめざらん。

ここで「今吾年已五十者、且隣於死矣」とあることによって、「非韓子」の撰述は契嵩五十歳のとき、即ち嘉祐元年（一〇五六）に相当し、まさに当時の仏教批判の動向に対応すべく、「広原教」を著わした年でもあったのである。

所定の紙幅も尽きたので、ここでは「非韓子」の輪郭をさぐるにとどめることとする。

注

- ① 「勸書」第一において、「原道」〔韓昌黎集〕卷十一・「原鬼」〔同集十一〕・「送高閑人序」〔同集二十一〕・「与大師師書」〔外集〕卷二、「勸書」第二において「唐故贈絳州刺史馬府君行狀」〔同集三十七〕・「答劉秀才論史書」〔外集〕二、「評讓」において「対禹問」〔同集十一〕などが指摘される。
- ② 拙稿「仏日明教契嵩伝私考」〔大谷大学研究年報〕第二十九集一二頁参照。

日本におけるドルトン・プラン

本学専任講師 田中圭治郎

はじめに

イソップ物語でおなじみの「アリとキリギリス」の話について調べてみよう。日本では文禄二年（一五九三年）の初訳以来、ア

リがキリギリスに食べものを分けてやって「よかった、よかった」となる結末が多い。しかし原典はそうではない。「夏中歌ってた？それは結構な。それでは今度はダンスでも踊ったら」と、アリは冷たく突き放して食べものをやらない。フランスの小学校では、子供が入学してくるとまず、ラ・フォンテーヌ寓話集の中のこの話を暗記させるそうである。

このように日本と欧米とでは、ものの考え方に、かなりの相違が感じられる。河合隼雄氏によれば、現在の日本の社会は「母性社会」であり、欧米などの社会は「父性社会」である。すなわち、「母性社会」とは「包みこむ」機能が強い社会である。母親は、わが子のすべてがみんな同じようにかわいい。すべてのものをわけへだてなく「包みこむ」。母のヒザの上では、善悪とか能力が問われることはない。

これと対比して、欧米などの社会は「断ち切る」機能を持つ「父性社会」だとみる。父親は子どもを、その能力や個性に応じて分類する。「母性社会」の雰囲気では、各人の個性はあまり強く意識されないが、「父性社会」では個性がなによりもまず強く主張される。

明治以来、政府は外国の制度を取り入れてきた。しかしながら、先に引用したイソップの例や、河合隼雄氏の指摘のように、日本と欧米との間に歴然とした違いがある。すなわち、その制度は同じでも、その根底に横たわる根本が何か違うように感じられるのである。明治以来流入してきた外国の教育思想、方法がどのような日本的なものに作り変えられてきたか、または、不幸にも、日

本に根付かなかったかについて論究してみたい。ここではドルトン・プランというあまりにも個性を尊重する教育方法が、あまり個性を尊重しない日本にどのように取り入れられたかについてのべることによって、教育方法移入の問題を究明する一助になりたいと思う。

ドルトン・プランは、実施されはじめた間もない時期に、欧米に滞在していた吉田惟孝が注目し、帰国後「最も新しい自学の試み、ドルトン式教育の研究」と題する著書を発刊することにより、また雑誌「小学校」に、吉良信之が紹介したことなどにより、日本に紹介された。ドルトン・プランの内容をかなりくわしく紹介した Evelyn Dewey の “The Dalton Laboratory Plan” も出版された年に、赤井米吉によって翻訳されている。しかし、それが広く普及するにいたるのは、当時欧米に教育視察に出かけていた沢柳政太郎、小西重直、長田新らが直接バーカストを訪れ、ドルトン・プランに基づく教育の実践に接し、これを成城小学校に取り入れてからである。

沢柳がドルトン・プランの名を耳にしたのは一九二一年（大正十年）九月十八日より二カ月半滞在した英国においてであった。沢柳がロンドン滞在中に、ロンドン、ストレッツダム州立高等女学校で大変面白い教授法を採用しているとの話をきき、見学に行き、同校が一九二〇年（大正九年）六月以来、ドルトン・プランによって授業を行っていることを知り、更に、前述の E・デューイの著書を求めその教育意見に同感した。彼らの帰国後、このドルトン・プランは成城小学校に紹介された。

ドルトン・プランの話を聞いた小原国芳主事をはじめとする成城小学校職員たちはその時ドルトン・プランに対して深い興味をいだいた。それは、ドルトン・プランが、その年の四月から四年生以上に、一週二時間実施している「特別研究」の趣旨とあまりに共通する点が多いことに驚きを感じると同時に、今後の「特別研究」に対するよき指導となり、成城小学校としての教育方法に対して貴い暗示を与えられたものとして非常に喜びを覚えたからだといわれている。

このようなドルトン・プランを実践した成城小学校の試みは、従来の一斉教授、画一教授で物足りなく思っていた全国の教師たちの心をとらえ、たちまちのうちに注目をあびたのであった。ドルトン・プランを実施に移した学校は、熊本県立第一高等女学校（大正十一年度の三学期から実験的に実施）、愛媛師範付属小学校（大正十二年度から採用）、岡山県倉敷小学校（大正十二年度より高等科一、二年に実施）、福井師範付属小学校（大正十二年度からなるべく原型通りに実施することを試みる）、福岡県大牟田市案（ドルトン・プランの教育を根幹として、プロジェクト・メソッドの長所をとり入れて考案されたもの、一応の完成は大正十五年）、長崎県苓岐島盈科小学校（苓岐郡におけるドルトン・プランのモデル校）がある。

このようにドルトン・プランによる教育を行った学校はかなり存在したのであるが、しかしながら、全国的に熱狂的に受け入れられたのは何といってもバーカストの来日によってである。彼女は一九二四年（大正一三年）日本を訪問し、各地を講演してまわ

った。その講演会場は全国各地において満員で、ドルトン・プランに関する関心の強さをみせつけたのであった。

沢柳や赤井にとっては、ドルトン・プランはわが国の教育改造運動を前進させるための刺激剤であり、自主的研究をすすめるうえでの参考案にすぎなかった。しかし、わが国の教育界の反応には、紹介者の意図をこえたもの、意図を離れたものがあつた。すなわち、ドルトン・プランを絶対視し、それを模倣することが自由教育、自主教育だと思いこむ教師が多かつた。それだけドルトン・プランに対する情熱は大きかつた。

しかしながら、臨時教育会議（大正六年—八年）によって方向づけられ、治安維持法（大正十三年）によって確立する新教育弾圧という文部省当局のしめつけは予想外のものであつた。このような文部当局の態度をみた多くの教師たちの心はドルトン・プランから離れていった。

以上のべてきたように、ドルトン・プランは一時期にしろ、日本の教育界に大きな影響を与えてきた。それは文部省中心の画一的な教育に対する一般教師たちの反発であつた。

アメリカにおいて一八六八年にはじめられたセントルイス・プラン以来能力別学級編成法のいろいろなプランが考案され、その極端なもの——個人の能力を最大限發揮させるという意味で——としてドルトン・プランが出てきた。ドルトン・プランは従来の学級という概念を否定し、また時間表をなくすること、その目的を達成しようとした。落第制のない、さまざまなものと同じ学級の中で教育する学級編成が支配的であつた日本でこのプラ

ンがどのように行なわれるのか。学級を解体に近い状態にして、集団学習が成り立つのかの疑問点が出てきた。

しかし、曲りなりにも昭和八年までやれたのは成城小学校の大きな業績であらうと思われる。それは、成城小学校が実験学校という性格をもっていたのと、すぐれた教師集団をかかえていたからに外ならなかつた。

しかし成城小学校はめぐまれていた。このような学校でこそはじめてドルトン・プランが実施されたのである。その一例としては、当時の公立小学校では、一学級七〇—七八名であるのに対して、成城小学校では三〇名であり、事典、参考文献、資料等が公立小学校にくらべて豊富であつた。

しかしながら、沢柳が成城小学校を設立したとき、彼はあくまで実験学校として設立したのであつて、めぐまれた一私立学校として設立したのではなかつた。ドルトン・プランが成城小学校にうけ入れられ、全国各地の公立小学校に影響を与えたのだったが、めぐまれた環境での教育ではダメであつて、日本の現状に合つた教育の下でそれが出来るような工夫が必要ではなかつたのだろうか。そのために、たとえ成城小学校という実験学校が沢柳政太郎がかつていったように「つぶれてもかまわない」のであると私には思える。すなわち、沢柳は、成城という実験学校を作ることによって、日本の公立小学校の教育改造を目ざしていたからである。すなわち、日本のドルトン・プランは、一部の経済的余裕のある学校が、温室的に試行したということであり、多くの公立小学校では、そんなものとは全く関係のない教育が行なわれていた。